

美術衝動

紙田 彰

2008.9

(ものは形を)

ものは形を現したい。

光はその一法。

ものとは、物質、形象、イメージ、霊、他、すべての存在。

これを形象化する手段は、つまり、他へのかかわり。コミュニケーション。他とは自・他の他である。独立性、異なったもの、区別するもの。

光とは、その及ぶ範囲に容易にものを浮び上らせる、弱小のエネルギーにも反応する、フラグメントが浮び上るには作用が軽微なものである。

[作成時期] 2002/07/

〔イメージ〕

光の波長。増幅・干渉・減衰

反射：吸収〔強度・明度〕

角度、スペクトラム〔色相〕

凸面、凹面における光の収束、拡散〔それぞれの中近、外縁部に油脂を（マチエールを凹・凸にする）塗り、効果を試す〕

[作成時期] 2002/07/

フラグメントの独立

形、線、色を現すことを作家という行為主体に求め、あるいは同調、照合して現れる。

断片、統合。しかし断片なり永遠の美（あらわれ）はないという断念をともな
って 。

連環の強い場合は物語性をもつに至る。

画家としてはポイントのフラグメントをいくつか考案する。

その配置、構成も、それ自体フラグメントである。

この構成的フラグメント集団は画家の表現行為の動機となるはずだ。

その後、描く行為のただ中における変化、構築の自動性、フラグメントの増殖、減衰によって表現は行為される

[作成時期] 2002/07/

(直線、矩形は)

直線、矩形は
人間のみが生成した抽象
つまり、存在していないもの
逆にいうと
人間の存在の意味という抽象性を示すことになるやも

「唯一無二」が存在の根源であるとするれば
人工性、つまり直線、幾何、数学などは
儚き一瞬の光芒ともいえる
それゆえに 全体性になりえぬとしても
瞬間の唯一無二かもしれない

絵画が直線の枠で示されているのは
人工性を示しているのに他ならぬ

[作成時期] 2003/02/11

(彼らの貌が) 2003.6.3 初めての個展で

彼らの貌が
その思慮深い あるいは狡智に長けた相貌が
この白い室の片隅に泛びあがる

ひととき打楽器の叩音が跡絶えたとき
低いしわがれ声で
おまへの始まりは何だ と
低い低い地の底の部屋と
同化して
問いつめてくる

だが 始まりなどない
あるのは終りだけだといっても
はじまりの光の眩ゆさへの

憧憬はせつない

この部屋のかすかな音の
つらなりと断絶
そして 糸のような液のような
ながいながい嗚咽
なつかしさ、繊細さ

もう ふたたび出会うことのない
はじまりのあの日よ
明るい人工光の 光量の中で
発光するオレンジの、黄色の、白の織りなす影のあわい

静謐だけが
壁の絵たちとともに
何かをたたえている

[作成時期] 2003/06/03

(白昼の光線が) 2003.6.5 初めての個展で

白昼の光線が窓から飛び込む
いや 光線に向かって疾り出す
おのれの翳

その壁にはいくつもの額が吊られ
額縁の中には
いくつもの水彩画が
確乎とした断片を誇示している

ああ！ すべてと等しき、ありとある断片的存在よ

光線は流れているのではない
光線は押し出され、衝き動かされ
ものとものをすり抜ける
そして、宇宙は変わる

壁の高みの、はじまりを描いた
小さな絵が
光の影を用いて

光よりも明るい、その誕生を始めている
紺色の奥深い、吸い込まれるような
闇に向かって

[作成時期] 2003/06/05

画家になる少女 2003.6.5 初めての個展で

水に溶ける絵の束を抱えた
少女が
降りはじめた雨に
逐われる

街の灯が乱反射する時刻
建物の壁に貼りつく人々

おい、ここだ、ここだ

少女の描いた鋭い曲線が
やはり刃物のように囁く
おい、ここだ、ここだ

たったいま走り出た画廊の
余熱が
全身に満たされている

わたしは絵を描くためにのみ
生きているのだ

少女の性急な想いが
雨に濡らすまいとする細い腕に
力を伝える

ひとりの画家が
生まれたのかもしれない

[作成時期] 2003/06/05

(地下室といえども) 2003.6.6 初めての個展で

地下室といえども暗い場所ではない
むしろ 光り輝く宝石の埋まる場所
音楽でさえ
鉱物の発する コズミックな諧調

その純白の壁に背を凭せ
何処にもないものだ と
去りゆく老翁の声を励みに
また色の滲出法について
考えてみる

この部屋の天井には
自然光を擬した照明と
人工的な光の蛍光灯が混じりあって
いくつもの光点からの光を
壁に発している

その光の落とすいくつもの影の中にある
実体はいずれか？
浮かび上がるはずの照り返しと
深い翳りの境界を探してみるが
はたして 実体を探すことに
意味があるのか……

だが デッサンをつづけていくかぎり
影から実体を手繰り寄せられることを
想い込んでいるに違いない
ああ、はかない人間の空想！

部屋の壁に凭れている
自分の存在が
乱反射する光と
そのおぼろな影の中に
いつのまにか消失しているのに
いつ 気づくのだろうか

[作成時期] 2003/06/06

窓の向うの白昼 2003.9 二度目の個展前後

窓の向うは白昼であり
室内はライトに照射された
白い壁
つまり 硝子が境界となって
部屋で佇んでいる自分と
窓際を通過する他人との
視線が偶然に交錯する
いや、互いの焦点が絡んだときに
どきりとする
しかし、道を歩く人は偶然を装って
こちらを意図して覗き
かつ見透かしているのだ
こちらは無理をして
その視線を見返すふりをして
薄い一枚の皮膜の中にのめりこみ
また、絡み合う

[作成時期] 2003/09/22

(絵筆が) 2003.9 二度目の個展前後

絵筆が進まなくなったとき、思考を宇宙の方に向けるか、人体のイメージを深めていく。
宇宙のそれは抽象論理ではなく、造形的、幾何学的純粋がわかりやすいかもしれない。
人体については、性的な官能と内臓のグロテスク、微小世界の宇宙的対応がある。

独自の造形は類を見ないものであるべきだ。
不同一というだけで十分に意義がある。
そうなると、現実とを繋ぐ形態は単に文脈でしかない。つまり、造語の物質性がすぐれれば、文脈なしでも全体性をもつということだ。
文脈はときにラインの連続性、関連性ということになる。ある種の誘導、解説、弁明でもある。
これは、見る側を想定しいてるものに他ならない。
自己解決が弱いときに、出現せざるをえないのか。
だが、思考を誘うものであるとするなら、そのような連関性は不要だということとはできない、という矛盾もある。自己と造形物との対話ということかもしれ

ない。

その対話の痕跡はまた見る側の参入の糸口にもなるだろう。

作家からのお願いと称して「興味を惹かれた作品があれば、画鋲でマークを」と貼り紙した件について

見る者の参加を促す。

画鋲を刺す行為で、見るものが何を注目するのか、何に関心があるのかを自ずから判らしめる効果。

自ら扉を開く行為を、コラボレーションに言寄せて誘き出している。

どれに関心があるのか、という選択を迫るのではなく、何に関心があるのかを思考するという自己行為を迫っている。

だから、具体的に作品は選ばれなくてもいい。

与件は、実は解がその中にあるわけではない。解は開かれた糸口のさらに向うにある。

作品が選ばれているわけではない。

見るものの思考が切り取られ、それ自体を自ら選んでいるのだ。

[作成時期] 2003/09/23

(境界のない絵) 2003.9 二度目の個展前後

境界のない絵を描こうとして考える

ひとつは、物質と物質の間に果たして境界があるのかということ。

もうひとつ、作品は境界によって囲まれているが、これは作品が世界を切り取ってできる断片ということではなく、位相が異なった場所から覗いているから、境界めいたものがあるような按配になっているだけで、実はこれは境界ではない。

つまり、位相と位相の間にはたして境界があるのかということである。

ここにきて、では境界とは何であるかという問題が浮上してくる。

境界とは区別する/せざるをえないときに出現するものだが、そのときこちら側とあちら側は区別されているのだろうか。

物質が永遠にその外殻を壊しながら「区別」の内部へと辿る、その先の結論は、空であり、無であるとする、その区別、すなわち境界は無へと向かう道筋を作っていることになる。

つまり、境界、あるいは枠は、こちらとあちらを行き来する通廊なのである。その通廊はあちらともこちらともつかない、曖昧に混淆した「両存在」とでもいうべきものなのだ。

そうすると、あらゆる独自存在は、あらゆる全体と一気に結合する宇宙包含とでもいうべきエネルギーをもっていることになる。

独自存在は核融合反応のように、境界を貫通することができるわけである。

[作成時期] 2003/09/26

街角の一瞬 2003.9 二度目の個展前後

違う人生が入り込んでくる
異質の空間のはずなのに
部屋の中から、突然に
日常の街路が出現する
日常の会話と人々の日常の生が
そこに立ち現れる
異質の空間は越境され
とまどいを覚えるが
これはどうしようもないことだ
こちらの存在が日常に侵蝕されて
まるで異物のような気恥ずかしさにおののいて
自分の部屋が
いきなり街路のまん中に放り出されている そんな
人々には この部屋が
通過する曲がり角、交差点、休憩所のように
やはり日常でくるんでいるものなのに違いない

[作成時期] 2003/09/26

(色彩は) 2003.9 二度目の個展前後

色彩は心に対し濾過作用がある
形は心理を整理する

[作成時期] 2003/09/26

(この絵は) 2003.9 二度目の個展前後

この絵は技芸でも趣味の世界のものでもない
絵は存在だ
ただ一つきりの存在なのだ

あぢさゐを分つ白骨 さるすべり

反逆とは何か
反逆計画の可能性はあるのか

人生には興味はあっても
縁のない人というのがあるものだ

[作成時期] 2003/09/22

作品「Hybrid construction」のそれぞれの宇宙軸に附するべき注釈

T1: Omnipresent time 左下、紺色の、遍在する時間
T2: Stagnated time 右中、青い、とどこおる時間
T3: Curved time 左上、黄色のかかった、彎曲する時間

S1: Increased space 右下、ピンクの、増殖する空間
S2: Reverse space 右上、オレンジの、反転する空間
S3: Plural space 左中、金色と赤の、多元的な空間

[作成時期] 2004/01/99

(単純明快なものは)

単純明快なものは 世界の受容であるから
ものを生み出す創造力を
欠落させている

[作成時期] 2003/10/99

展示室にて

かすかな昂奮が息づいていることは否めないようだ。

床を這うように何ものかの硬い尖端がひきずられていく。
それは見ることのできないものなのであるが、見えるような気にさせる確かな音。音そのもの。

[作成時期] 2005/05/99

刻印

私はなぜ刻むのか
私はきっと細胞のように、あるいはリボゾームのように
赤血球のように、白血球のように
あるいは癌細胞のDNAのように
それぞれの存在の叫びを取り上げるために
きっと刻んでいるのだ
刻印される線分のそれぞれが
彼らの抑圧に対する闘いだから

私という肉体が、精神が、意識が
彼らを抑圧している元兇だ
そして また私も
私を抑圧しているものに対して
自由への闘いを
キャンバスに向かって
刻印しているのである

2005年6月「第8回個展」会期中の断片

[作成時期] 2005/06/22

(絵を描くという行為は)

絵を描くという行為は、宇宙論的な体の傾け方をもつことで、肉体も、精神も、意識も、存在の単位の構造全体が自らの闘いを始めるのだといえる。
およそ、生きることも含めて、存在の哀しみというものは、こうした永遠の、非和協的な闘いを生きていくところに本質があるに違いない。
それは創造することであり、ないものを唯一生み出すことで、あらゆる抑圧と闘うことができるのだ。
ないものを求めよ！

あらゆる価値にまどわされるな！
それらはただの一瞬の悪夢に過ぎない。何かと引き換えにしようとしたときに、
その悪夢の餌食にされてしまうのだ。
ただ、つくりだすこと。そこにしか行為の充実はない。

2005年6月「第8回個展」会期中の断片

[作成時期] 2005/06/22

(明け方から削り始める)

明け方から削り始める。今回の会期中は、毎日、明け方から大作に取り組むことになろう。すでに五分の一は出来上がった。
このところ、絵を「描いて」いるという言い方をしないで、「作っている」と、他人との話で言っていることに気づいている。
たしかに、サンドペーパーとニードルで削り、筆は、絵具を叩きつけ、刺青のように刻線の中に埋め込むために使っている。
あとは乾くのを待ち、次の一枚に同様の作業をする。
また、どのように絵が変化していても、体の奥底から湧き上がるものを信頼して、失敗するなどは微塵も思わない。
結局、このことなのだ。技術が身についたとか、感性が備わってきたとかいうのではなく、ただ「えいよ！」の覚悟と、出てくるものへの信頼だけが、およそ描くことの神髄なのだ。
そうすると、何が失敗なのか？ 何をもって失敗とするのか？
つまり、結果としての作品の成否は本質的な問題ではないのである。あるいは、結果としての作品をも「失敗はありえない」と捻じ伏せてしまう、立ち上がるものがここにあるのだ。

2005年6月「第8回個展」会期中の断片

[作成時期] 2005/06/23

存在と宇宙論

私の絵は、存在の解放というミクロの問題と、それが解明されるために向かわなければならない宇宙論、つまりマクロの問題に同時に関係している。
同時にということは、包含という構造の問題を指す。
私の存在論的な位置は、つねに宇宙的多次元と量子論的なミクロとの「中間」

あるいは相対的な中間にある。

このことは自由の問題でいうと、抑圧と被抑圧を同時に包含しているということになる。

絵は描くという行為と、何ものかを創造するということで成立している。絵の成立以降の美術史を云々する輩もいるが、それは別の問題であり、美術の本質、つまり描くという動的衝動、創造という宇宙論的ダイナミズム、この関係とは別のことである。

美術は、結果、というより社会史的適応物としての中間概念にあるのではない。つまり、美術史的位置付けはこのような創造的スケールからは些細なものなのである。

人間とは何か、自己とは何かを問うことは、ミクロ的な宇宙論とマクロ的な宇宙論、これらを総合する存在論を問うことである。

そして、その問いの源泉にあるものは、自己は自己であるという自由への意志であるに違いない。

2005年6月「第8回個展」会期中の断片

[作成時期] 2005/06/24

オートマティックな助走

疲れているときの思考、あるいは意欲は打ちのめされているのか。まとまりのつかないものがぼんやりとでもあるということもなく、ただ、体の疲れが。しかし、本当なのか。書くことに臆している、怠けている、意志に結びつかないだけなのでは。

このように歯止めのない筆記をしていると、しだいに何やらが出てくる。それが、書く神経なり意識なりに助走を与えるか、慣性的な一歩を与えればいいのか。

何とか、現在、こうして書きつづけていける。一時は書くことができないのかと危惧もした。

疲れてはいるが、手を動かすことで文が出現することは事実のようだ。とりとめのないでたらめの文でも、十分、助走の役には立つようだ。ということで、この文はただの助走のための走り書きにすぎない。

絵を描いているときに文章を書くという方向がなかなかつかめないような感じを最近持っていたが、というのはこのところ絵を描くことに精神も肉体ものめっていたからであるが、しかし、そのようなことではなく、ただ書くことを離れていたために、書くことの滑りが悪くなっていたに過ぎないようだ。

文字にしても、こうして滑りがいったん出てくると、書き慣れているような筆

跡が生まれてくる。
何とも、人間の動作はうまくできているようだ。
これも助走。
ところで、助走というのは捨て文のこと也。

2005年6月「第8回個展」会期中の断片

[作成時期] 2005/06/21

(スクラッチングは)

スクラッチングは、存在の解放衝動
宇宙へのあらゆる存在の刻印行動

あらゆる交換性を切り離す必要がある
なぜなら、それらは支配と権力を示す価値の形態だから
経済とはその総過程である

[作成時期] 2005/08/99

(光が折り畳まれ)

作品とスポットライトの間に
ときどき空間が挟られたような
わずかの隙間が斜めに走ることがある
これは文字通り出現するわけであるから
亀裂のたぐいかもしれぬ
光を透過しないのであるから
その影の向こうは存在しないし
亀裂の中は 光が折り畳まれているに
ちがいないのだから
光の面を記憶させて
迂り落ちる
視野から迂り落ちるのか
思考から滑落するのか

展示空間は一枚の巨大な絵と
十数本のスポットライトのほかは

白く塗られた天井と壁
音もなく、何やらの気配もなく
滑り落ちる この破片たち

平面の作品の 2 次元の中に
蔵われた 無数の異世界

第 9 回 "Super-string Theory" 展にて

[作成時期] 2005/08/12

作品 “ Super-string Theory ” についてのメモ

1 次元対 1 次元に収斂されるということ。
すべての次元を 1 次元に折り畳むとすると、基点と全体との対峙となり、包含関係が消失する。その 1 次元は多次元を畳み込んでいる。
宇宙と内部存在を求めることは同じことで、これを同時に実現しているのは行為である。
ミクロの宇宙論とマクロの宇宙論という同一の問題を、人間存在は肉体的行為でつなぎとめている。

この肉体的行為という原初性。
ここから、細胞・DNA から量子論的な電磁気力まで下る存在の基点へと思考をめぐらすことができる。
それは、その地点から立ち上がる解放衝動が何を突き抜けていくのかという問題でもある。
11 次元の宇宙論をそこから掴まえられるかということ、1 次元 vs. 1 次元。

生きかつ思考する。
美術とは作品をいうのではなく、この行為に意味がある。
作品が物質的に永遠ではないのだから、したがって作品に向かう技術も現実性も評価さえも意味はないのだし、まして美術作品とは行為の一方法であるから、問題はあらゆるアートの底にある行為と思考をつなぐもの、解放衝動自体にあるといえる。

第 9 回 "Super-string Theory" 展にて

[作成時期] 2005/08/12

浮游するオブジェ

巨大な絵（平面）の前で
かすかに廻転する
粘土製の球体の表面で
音楽の波が届いては
反射する

光もまた
波動の形式で
これを擦り抜ける

重力は
全宇宙からここに届くには
あまりに広汎で
かつ 弱い

球体の廻転を促すのは
確率のスピンであるに違いない

2005.9.26-10.1 第10回個展にて

[作成時期] 2005/09/26

息を吹きかけたとき

奥行きがあるように見えるが、向こうは平坦で、向こうの歴史の光が異なるだけで、つまりは時間の凹凸が色の違いをもたらし、奥行きと見せている。だが、私の見る奥行きは、私の視覚の反応時間、すなわち脳の反応であるから、内部に距離の構造を作っている。

そこでは、向こうは平坦ではなく、空間を認知しているのである。

だとすれば、「私」から見た場合、奥行きは確かに存在している。つまり、私の内部に奥行きが存在しているということは、宇宙が鏡面であって、内部が実在であるという逆転も考えられる。

そうであれば、まさしくキャンパスという平面は宇宙そのもの、コズミック・ミラーという側面があるのではないか。

平面に平坦な平面を重ねていくという行為はまぎれもなく創成の業、光の創造であるのかもしれない。

すると、描き手の私は、キャンパスの向こうから見たときに、視ることのできない一点、始まりの string の一振動となるのかもしれない。

息を吹きかけたとき、生命は漲る。

2005.9.26-10.1 第10回個展にて

[作成時期] 2005/09/28

(本気の絵なのか)

本気の絵なのか 趣味的な絵なのか
命を削っている絵なのか 装飾的な絵なのか
命を削っている絵は装飾的な絵にはなりえない
絵のめざすところが違っているから

[作成時期] 2005/09/99

(作品について)

広大な影がたち現れる。あるいは遠ざかっていく。
その建物群のような集積する影は歴史そのものであるのか。過去そのものであるのか。私は影の中に蠢くひもを描いてみた。揺れ動く、律動する、沸騰するそれらの環を。
それらは落下するようにも思われるし、永遠にとどまるようにも思われる。しかし、一瞬にして位置と形を変える。
次に記憶の残り香とでもいうような橙色の空間を重ねてみた。水蒸気のように立ち上がる性質をもっているのか、それとも降りつづく疲弊したガス。重くたちこめる粒子たち。
そのとき、こちらの絵には量子が選択され、向こう側の絵には量子は出現していない。
私は、二枚の絵をひとつに描いている場合の量子と別々の相似するものとしての絵を描いている現実の二枚の絵として、自ら選択しているのか。
光は片方では省略であり、もう一方では光のスリット。
現れた量子の見えざる向こうには、別の次元の空間が映っているのか、閉じこめられているのか、光に反して、光のゆきつく先が思われるのである。

第12回個展で

[作成時期] 2006/04/27

(作品に取り囲まれるということが)

作品に取り囲まれるということが何をその時間に与えるのか。
その作品はたしかに自らの生み出したものなのであるが、すでに私の手の届くところには存在していない。それはただ悲しみのうちに充満している過去の音楽というようなものでもなく、知られざる未来の破滅(おお激烈な破滅よ!)ということでもない。ただ瞬間が永遠であるように、永遠が偶然の一瞬であるような、我を失わせしめるごとくの原初の存在。
だが、それは私をそこに誘き入れようとしているのか、それとも私を遠ざけようとしているのか、あるいはそれと私の間隙には遮断された透明な皮膜が漂っているともいうのか。私はただ漂っている。意識ばかりではなく肉体そのものがたしかに漂っているのを感じている。

体が、からりと変換するような、そのような極限性を目のあたりにしているのかもしれない。けれども、その視線は誰のものなのだろう。私はすでにそのような目から失われているのだから、その眼は変換という状況そのものなのではないか。変わりつつあることが変わること自体を知っている。
私は作品にそのような意味あいで、仕上がりのサインを入れなければならない。

第12回個展で

[作成時期] 2006/04/25

ビッグクランチ 「宇宙音楽」の事象地平

僕は mica のように
剥がれ落ちるべきものが好きだ
か細い線、透明な薄片、かすかな光
ある種の記憶のような

僕は mica のように
重なりつづけるものが好きだ
色彩がとどこおり 消えてゆく平面
忘れうべき記憶のように

近づいて裸眼で凝視すべきである
重層するプレパラートに
複雑な罅割れが生じ
僕は閉じ込められる

幾多の異相が 本当は一つであるように
こちらに光があるのか あちらに光があるのか
物質は存在するのか しないのか

僕はそのあわいのビッグクランチ事象地平で押しつぶされる

第 12 回個展にて

[作成時期] 2006/04/28

作品「 10^{-44} sec. 重力の発生」

この作品は、横浜市・BankART Studio NYK で 2 カ月間(2006.10.1-11.30)にわたって公開制作したものである。

タイトルの「 10^{-44} sec.」とは時間の最小サイズ(プランク時間)で、ビッグバンから 10^{-44} 秒後に宇宙にある 4 つの力(強い力、弱い力、電磁気力、重力)のうち、まず重力が発生したというものである。重力はマイクロではもっとも弱い力であるが、マクロではあらゆるものについて無限の距離に力を及ぼすとされる。

F120 号 4 枚組の大作は、じつに 10^{-44} 秒という、瞬間というにはあまりにも小さな、恐るべきサイズをイメージしている。

作品の全体を横に貫いて敷設されたケーブルの痕跡、その盛り上がった絵具のマチエールはひもエネルギーを表し、締めつけられた宇宙の原初がその最初期に重力を発生させ、宇宙の基本的な力を誕生させるという思考イメージで作られている。

力はそれぞれ量子的な存在であり、重力はグラビトン(重力子)という粒子的なイメージを持つ。ビッグバンの周囲には宇宙の時間の範囲を示す楕円のユニバースサークルがあり、マスキングによってできたキャンバスの下地の不定形のいくつかのかたまりは多次元のかたまりのイメージでもある。

またそれらは、絵具の層の重なりを剥き出しにし、平面の多層化を強調している。

キャンバスという布、木枠の露出、包囲するものされるものあいまいな関係、裏側と表側、回り込むもの、折り込まれるもの、これらは現実との対峙をも含め、曲率を持った時空面が多重化しているという含意でもある。

この作品の中で、作家は作品を創造する行為のうちに実在している。それは、作品との物理的な距離のある関係でいうのではなく、ニードルで刻まれた無数の線のひとつひとつ、切り刻まれることで変質したごつごつした無数の粒状の絵具のかたまりに内在しているのである。

つまり、これらのマチエールは存在の基点のそれぞれから大量に発せられた戦慄する狂乱的な泡でもある。

そして、これらの行為のすべてが 10^{-44} 秒という恐るべき極小の時間に、静かに呑み込まれていくのである。

[作成時期] 2007/05/02

作品「CMB(Cosmic Microwave Background)」 1～5

宇宙マイクロ波背景放射をテーマにした5点。

ビッグバンから40万年後に宇宙はプラズマ状態を脱し、「宇宙の晴れ上がり」という時期を迎える。この透明で冷えた空間に放射されたマイクロ波(光子)は宇宙全域に及び、この検出がビッグバンと膨張説の証拠とされる。

ひもの曲線のパターンと研ぎ出しによる下層の絵具の斑模様が、宇宙膨張によって赤方偏移を受けた光子のイメージでもある。

マスキングで切り抜かれた部分は、匿された次元、露出したこちら側、あちら側。

[作成時期] 2007/05/02

作品「Uncertainty Principle」 1～4

M6号サイズの4点の作品では、珍しくひもは使っていない。

タイトルは量子論における「不確定性原理」である。

カーボンブラックの粉を樹脂で練り込んで、キャンバスに何度か重ね塗りし、研ぎ出し、絨のような艶を出す。下地にはアクリル系の絵具の色点を散らしてある。

S字形に見える図形は相転移をイメージした物質であり、これ自体ひもでもある。銀色をベースに、図形の増加とともに金色で侵蝕の変化をつけてパリエーションとした。重ね合わせと不確定性。

また、マスキングをはずした下地はぼんやりとしたスリット(切れ目)が光の二重スリット実験を想起させ、量子の世界を印象づける。

[作成時期] 2007/05/02

作品「反-次元のかたまり」1~5

ひもエネルギーが単純化された配置で、物質と空間を締めつけている。その傍らで次元のかたまりらしきものが物質の部分を垣間見させている。

また、真空の中に匿されている白いのっぴりとした反-次元のイメージは次元のペアである。

[作成時期] 2007/05/02

作品「Super-string Theory」

それぞれの存在、あらゆる存在の解放衝動と超ひも理論の彼方につづく宇宙論的自由とは何かを求めて

第7回展、第8回展で発表した「Super-string もしくは立ち上がる解放衝動」「White Image」小シリーズで、スクラッチングとひもの埋設、研ぎ出しによる画面造形の方法に、ある方向性を見出すことができた。この手法による大作を企画したのはこの直後である。

それまでの「解放衝動」という思考は、これまでの人間 肉体 細胞 モナドへと向かう存在の下層への探求から生まれたものだが、さらに極小の量子と極大のユニバースがひも理論によって結合するという刺激的な現代物理学に大きく触発されて、「Super-string シリーズ」を大テーマにすることにした。これは、抑圧と自由の問題である解放衝動とも本質的に連続していると考えられるからだ。

この5枚組の作品においては、極小とは光とひもの波打ちであり、振動であり、極大のユニバースとは空間と時間の大きな変化である。

振動するひも、大きなうねりを持つ巨大なひもを麻、棕櫚縄、綿糸などを下地に埋め込み、大量の絵具を重ねていき、ニードルやナイフでスクラッチングし、サンドペーパーで何度も研ぎだしていく。

ここには、モナド 細胞 肉体の律動という、いわば「解放衝動」の肉体的行為がある。そして、そのことがマチエールの造形に直接結合していくのである。

string (ひも) の全振動は、この解放衝動とキャンバス上で出遭っているのだ。

宇宙はこの存在の律動、肉体の律動とも深く結びついているのだ、という思いがするのである。

「からだを張った」作業において意味を持つものとして、次の点があげられる。
・純粋な肉体的行為の繰り返し。

- ・創造行為における原初性の発動。
- ・存在に包含される「それぞれの存在」の解放衝動。

[2005.5.26 ~ 7.20 にかけて F100 号 5 枚、横 6.5 メートルの大作を制作。制作過程の写真記録を WEB で公開している。]

[作成時期] 2007/05/01

作品「転移」1, 2

相転移 phase transition とは、ある物質の相が別の姿の相に転ずるということで、超ひも理論の数学ではひもエネルギーで締めつけられた次元空間が別の形態の空間に移行するというものである。

これは、いくつかの超ひもの幾何学や数学が主要なひとつの理論の別の現れであるとする M 理論や、ブラックホールからビッグバンが生まれるなどのアイデアに通じるようでもある。

また、見方を変えるということ対象が変化するというだけでなく、物質そのものがおのずから別の物質状態あるいは宇宙相に変化することをも示唆している。

次元はそもそも理想化されたスケールであるが、「転移 1」は、曲率をもった次元が物質の中に突如として生まれた空間が裂けて相転移するときに飛び出したイメージである。4 つの力、あるいは 4 つの次元。フロップ転移（ひも理論の幾何学であるカラビ-ヤウ空間で、空間の相が入れ替わることで空間の破滅を修復する転移）を暗示した、千切れそうなひもエネルギー。

また、「転移 2」では、同じ相転移でもまったく形の異なるねじれた管、環のイメージ。視点を同時に合わせることはできないが、同じ物質が同時に異なる位置に存在している。

作品のそれぞれには、裂かれた形のひもが黄色の絵具の底に埋め込まれている。

[作成時期] 2007/05/02

作品「解放衝動の発生」1,2,3

制作: 2005.12, oil, canvas, 130.3 × 162.0cm 3 点

これは「Super-string Theory」5 枚組の宇宙論的風景に対して、量子論的イ

メージを中心にしている。あるいは、ライプニッツのいう「モナド」という存在の基本単位をイメージしている。そのため、タイトルを「解放衝動の発生」とした。

そもそも3枚組であったが、それを分割してそれぞれ単独の3枚の作品としたのだが、それも「個」に分岐することと関連しているのかもしれない。

この作品で初めて、下地段階でマスクングした部分を露わにし、異なった位相を暗示させるという方法を試すことになる。

モノトーンの安定した色調の細部で、激しいひもとスクラッチングのゆらぎがある。もちろん、量子的なゆらぎを表しているのだが、物質粒子として実存する量子が現在の自分の数をカウントするように出現する。

偶発性の中に、実在は己れの叫びを宇宙に轟かす。

[作成時期] 2007/05/10

作品「解放衝動の探求」I,II

制作: 2006.4, oil, canvas, 130.3.3 × 162.0cm 2点

2006年の最初の大作2点。

燃え上がるようなオレンジ。沈潜しつづける暗いオレンジ。

オレンジの向こうには抜きがたく異質の空間が貼りついている。

だが、それは平面を剥ぎ取った裏側の世界でもある。

また、暗部には文明の廃墟、建造物の名残りのような混淆した物質の蟻集する影。

ひもは、このような多層的な世界を縦横につらぬき、ゆらめいている。

光の焦点となったある瞬間、量子と見まごうかたまりが異物のような色彩を放って浮かび上がる(I)。

別の作品(II)では、光の焦点さえ危うく消失し、そこには量子は存在しない確率の谷間であったのか。

われわれの肉体にある根源はいずれの運命に存在するのだろうか？

[作成時期] 2007/05/10

作品「 10^{-36} 秒」L,R

2006.7, oil, canvas, 130.3 × 162.0cm 2点

ビッグバンから 10^{-36} 秒後に高次の真空相転移が行われ、すでに析出されてい

る重力以外の3つの力、電磁気力、強い力、弱い力が発生する。こうして、真空である原初の宇宙から4つの力が分離することで物質が生成されていくことになる。

相対性理論では力は時空間の歪みであるとされるが、超ひも理論では粒子の交換である。

この粒子はひもエネルギーの振動なのだが、それらはどのような物質情報を担っているのだろうか。

物質は対称性という複雑な分岐の過程であり、巨大な宇宙もそもそも一個の粒子、その粒子と反粒子に端を発している。何も無いものが無理やり引き剥がされて、何も無いからこそ復元しようという宇宙規模のエネルギーがさらに分離し、物質も分岐し、ぶつかり合い、集合し、またぶつかり合い、このようにしてデコヒーレントが働き、宇宙は膨張していく……。

そして、この力の分離という、存在というにはあまりに短い認知不能の瞬間抜きには、あらゆる事象と万物は実在しえないのである。

物質粒子と力の粒子が混淆し、劇しくゆらぎ、このプラズマの内と外との境界はそれ自体が位相転移なのだが、さらにこの宇宙面が布のように裏に折れ曲がり、別の多次元を包み込み、そこにひょっこり現れ、剥き出しにされるものが現実であるとすれば、堅固に見える現実とはいったい何なのだろう。

[作成時期] 2007/05/10